



RIFS通信

NUMBER

39

平成21年3月25日発行

目次

1. 活動内容

2. 「英語指導開発

ワークショップ事業」について

..... 新里 眞男

3. 東京国際大学「英語指導力

開発ワークショップ」に

参加して

..... 松林 世志子



活動内容

研究交流事業

- ・モンゴル開発研究センターとの共同研究
- ・企業倫理研究会
- ・中東報告会
- ・日本語教育セミナー
- ・カナダ SS HRC 科学研究助成研究プロジェクト

広報・出版事業

- ・RIFS通信、国際を考えるシリーズ

「英語指導力開発ワークショップ事業」について

東京国際大学 言語コミュニケーション学部 教授 新里 眞男

2007年度、東京国際大学は言語コミュニケーション学部が中心となり、文部科学省から「英語指導力開発ワークショップ事業」の実施主体として採択された。この事業は、2005年に文部科学省が発表した『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』の一貫として着手された施策の一つである「英語教員の資質向上に関する施策」の一部として実施されたものであり、「各地域の英語教員の中に英語教育の中核的なリーダーを養成する」ことを目的として行われたものである。国全体としては、2005年度に始まり2007年度までの3年間続いた事業であるが、東京国際大学はその最後の年度に採用されたのである。

上記『行動計画』に基づいて、各都道府県や政令指定都市では2002年度から5年間、原則として全員の英語教員が参加する悉皆研修として「英語教員の資質向上のための研修」が実施されていた。本大学が採択された「事業」は、それらの研修を受講・修了し、かつ成績優秀である者を対象として、より「高度なワークショップ」を行うものであった。

そもそも、『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』が出された理由は、日本の外国語教育、特に学校教育の中における英語教育の非効率性についての怨念にも似た大衆の実感だったと考えられる。1996年には、『どうして英語が使えない？…「学校英語」につける薬』という著書（酒井邦秀）が出され、2005年には『英語教育はなぜ間違っているのか』（山田雄一郎）という著書も出版されている。つまり、日本の英語教育は「間違っている」ことが前提とされた議論が行われていたのである。

中学・高校と6年間も英語教育を受けてきても「英語が使えない」という国民の実感、TOEFLの国際比較で、日本がアジアでは北朝鮮に次いで下から2位という状況が続いていることと見事に符合していた。日本の英語教育は、多くの人々にとって英語力を伸ばすものではなく、英語への劣等感、嫌悪感を産み育てる機能を果たしてきたのではないかと、あるいは、これらの感情の逆説的・屈折した表現としての、いわれない「英語への憧憬」を植え付けてきたのではないかと。

これらの事態の原因として、国の英語教育の施策や英語教師の授業方法の「まずさ」が取り上げられた。そしてこのことへの対応が、『行動計画』のもとになった『「英語が使える日本人」育成のための戦略構想』が考えられた理由なのである。この『戦略構想』では、英語授業の改革、英

語教員の資質向上、英語学習者のモチベーションの向上、入試改善、小学校英語活動の導入検討という『行動計画』への5つ柱が示されたが、そのうちの英語授業改革と英語教員の資質向上を合わせて図るための施策が、この「英語指導力開発ワークショップ事業」だったのである。

この事業は、全国で6地域が指定され、実施主体としての大学が、地域の教育委員会との連携・共催の下に実施するものであった。実施の最終年度となった2007年度には、全国20大学から応募があり、東京国際大学を含む6大学が採択された。文科省によると、各大学が提出した実施計画書を、外部評価委員がプログラム内容の目的、内容・構成、実施可能性・実効性、波及効果、評価方法の妥当性などの観点から審査し、決定がなされたものであるとのことである。本学としては、関東近県の著名有力大学を差し置いて採択されたものであり、大いに自信を与えられた。

文科省の示した事業内容例は、「4技能を効果的に向上させるための指導のあり方や学習方法などに関して、授業の実践、ディスカッションなどを多く取り入れたワークショップ」というものである。それを、例えば3～4週間程度の期間、合宿形式で集中的に行うことが期待されていた。従来の研修と比較して、期間的にも内容的にも非常に意欲的なものであることがわかる。

東京国際大学としては、以上のような基本的な研修趣旨を押さえながら、独自に一層意欲的な研修計画を立てた。具体的には、採択された大学のほとんどがやっていたような夏季や冬季の休業期間だけを利用した集中研修ではなく、9月から12月の授業期間を含んだ5ヶ月にわたる長期的な研修を考えたのである。この期間に、参加者は相互に学校を訪問し、それぞれの授業を参観し、建設的に批判しあい、よりよい授業方法を一緒に考え出すのである。このようにして、参加した英語教員が英語教育に関する理論を夏季に集中的に学ぶだけでなく、通常「2学期」と言われる授業期間にお互いに授業を見て、そこから集団としての改善策を考え、それを授業の中で実験的に試してその有効性を評価し、さらに次の改善に向かっていくという、集団アクションリサーチ(=collaborative action research)の手法を実践することを主眼としたのである。まさに、理論と実践を結びつけること、つまり、教室という教育実践現場に密着した指導力の向上を目指した研修を考えたのである。このことにより、参加者に

は、研修中だけの現場離れした理論学習ではなく、研修後も継続的に授業改善に取り組めるような自律的・恒常的な授業改善能力が育成されるものと考えられたのである。

具体的には、第1期（2007年8月6日～10日）で「英語指導の基礎的開発」プログラムを行い、参加者自身の英語力を高めながら、生徒に自己表現力や発表能力などの実践的コミュニケーション能力を育成するための指導法や評価法の習得に努めた。第2期（2007年8月20日～24日）では「英語指導における実践力・企画力開発」プログラムを行い、参加者の授業ビデオを相互に検証し、議論を通して授業改善のための仮説を組み立てた。第3期（2007年9月～12月）には「英語の実践的指導力開発」プログラムを組み、参加者がグループを編成し、相互に訪問して授業を見て、さらなる授業改善のための仮説を立てることにした。第4期（2007年12月26日～28日）には「成果と問題点および将来的課題の確認」プログラムを行い、「事後授業ビデオ」を相互に検証し、さらなる改善点・課題の確

認を行い、今後の授業改善計画への展望を得ることとした。

以上のように、プログラム内容としては、理論の面でも実践の面でも、さらに両者を有機的に結びつける意味でも、非常に意欲的なものを用意できたと考えている。また、それだからこそ文科省から採択されたものだと考えられるが、現実には大きな課題があった。それは、参加者が埼玉県4名、千葉県2名、計6名しかなかったことである。もちろん連携を取った埼玉県教育委員会や川越市教育委員会からは参加者を送っていただいたが、募集の時期が遅かったこと、大学の知名度、宿泊研修や長期研修が与える負担感などの問題があり、多くの著名講師陣をお招きしたにも関わらず、小規模な研修となってしまい残念であった。しかし、研修そのものは、小規模になったため若干の予定変更はあったが、大成功であり、大きな成果を収めることができたと自負している。

今後は、この経験を生かし、本学部、本大学の英語教育だけでなく、地域そして日本全体の英語教育の一層の発展のために、何らかの貢献を続けていきたいと考えている。

東京国際大学「英語指導力開発ワークショップ」に参加して

東京国際大学 言語コミュニケーション学部 准教授 松林 世志子

「中学、高校とあわせて6年間も英語を勉強してきた、英語が使えるようにならないではないか」と批判され続けてきた日本の英語教育であるが、最近は随分改善されてきたと思う。実際に文法力が昔の学生ほどなくても、英語で話す力がある学生が出現しはじめている。高校の先生方から聞いたのだが、最近の教員研修ではディベートを学ぶチャンスもあり、授業でディベートを英語で行うこともあるらしい。

こうした英語教育の改善は、教師の努力と教師同士が集まって研修を行える制度のためだと強く思う。東京国際大学では「英語指導力開発ワークショップ」を開催し、私も宿泊研修の講師としてワークショップを行う側として参加した。私自身が指導を担当するときの準備として、ほとんどすべての講義を聴講し、受講生の先生方とともに学び合う機会をいただいた。

今回参加した受講生の先生方は、夏休み中でも学校の抜けられないお仕事もあるなかでのご参加だった。おそらくこのワークショップの内容を知って、なんとしても参加したいというお気持ちだったと思うが、片道3時間以上もかけて通われた先生もおられた。忙しい中で、内容の濃い研修に参加するのは大変なことだったと思うが、このワーク

ショップが受講生の先生方の英語力や英語指導力の改善につながったことと思う。ここにこの研修の特徴を指摘し、振り返りたい。

1. コミュニケーション能力をつけさせる英語教育を考えるチャンス

理論中心の講義やワークショップから実践的なワークショップまで、バランスよく理論と実践が学べるカリキュラムだったが、初日の鳥飼玖美子先生の「今求められる英語力—真のコミュニケーション能力を培う為に」という基調講演がこのワークショップ全体の鍵となるコンセプトを表していたと思う。鳥飼先生は、「真のコミュニケーション能力とはどういう能力のことか」「英会話ができることがコミュニケーション能力か」と私たちにワークショップで考えるとよい点を質問の形で問いかけられた。コミュニケーション能力をつけさせるような英語教育とはどのようなことかと実際にワークショップ期間中もずっとそのことが音楽のリフレイン箇所のように頭の中で鳴り響くことになるのであった。ある一定期間に集中して、そのことをテーマにさまざまな角度から英語教育を考えるということは、

日頃、明日の授業準備で追われている教師にとっては、またとない機会になったであろう。

鳥飼先生の基調講演では、言語が思考に影響を与えるとするサピア＝ウォーフの仮説や、チョムスキーの Communicative Competence の考えとハイムズの Communicative Competence の考えをはじめとする「コミュニケーション能力とはどのような力のことか」という議論が今までどのようになされてきたか、また、それがどのように英語教育に影響したかということを経史的に概観した。コミュニケーションとして英語を教えることがこれまでにどのように発展してきたかを3時間で概観することができ、大変中身の濃い3時間になった。

コミュニケーションとして英語を教えることは、のちのワークショップのセッションでさらに考える機会があり、授業準備のためのヒントが得られたことと思う。

2. スパイラルに学べる仕組み

「コミュニケーション能力をつけさせる英語教育」がワークショップ全体のコンセプトだったと思うが、このことは毎回のセッションで何度も考えさせられ深められていった。例えば、米山朝二先生の「授業の組み立て」というセッションでは、PPP (presentation, practice, production) などのような授業の展開の仕方を学びながらも、communicative でない教材をどのようにしたら生徒自身とかわりを持たせた教材に変えることができるのかということを実際の教材を用いて教えられた。少し工夫をするだけで、communicative な教え方に変えられることを学んだ。他にもワークショップ期間中に、4技能の教え方や異文化理解、第2言語習得理論と英語教育などの他のセッションを通して、コミュニケーション能力をつけさせるための英語教育について考えを深め、夏のワークショップ期間の最後には、宿泊研修で受講生の先生方の模擬授業を行った。初めに学んだことが深められ、最後に自分の考えを実践的に行ってみるという仕組みになっている。いわば、ワークショップ全体が、PPP のような流れになっていた。

さらに、夏休み後にも、お互いに自分の授業をビデオで撮り見せ合い、自分の学校での実践を通してディスカッションをするなど、研修は続いた。

冬休みの期間は短いので、3日間だったが研修を行い、理論と実践を学べた。本当に中身の濃いワークショップだったと思う。

3. 豪華な講師陣のワークショップ

スパイラルに学べることがこの研修の特徴だと書いたが、もう一つの特徴として、豪華な講師陣とその内容が挙

げられる。鳥飼先生のコミュニケーション能力についての講演、松坂ヒロシ先生のリスニングとスピーキングについてのワークショップ、米山朝二先生の授業の組み立てについてのワークショップ、佐野正之先生のアクションリサーチ、小菅和也先生のオーラルイントロダクション、松本茂先生のディベート指導というように、例を挙げただけでも、その道の第一人者によるワークショップの連続だということがわかるだろう。

2002年度から3年間NHK ラジオ『リスニング入門』の講師もされたことがある松坂ヒロシ先生のワークショップでは、高校生が興味を持つような映画から取り出した教材を用いてリスニングを受講生にさせて、学習者をつまづかせるリスニングの音変化について指摘された。リスニングの音変化は、松坂先生がラジオでも教えておられたことだが、今回はそれを少数で学べたことになる。また、推測させながら聞く力を伸ばすために行う「先取りリスニング」の練習も行った。聞きとらせて答え合わせをして終わり、という教え方が多いリスニングであるが、生徒の間違えが教えることの始まりであるということも教えられた。

NHK テレビ番組やラジオ番組を数多く持たれてきた松本茂先生のディベート演習の授業では、ディベートを学べたのもよかったが、何よりも私が感心したのは、教え方の上手さである。わかりやすい説明のあとに、次のアクティビティのみのハンドアウトを配布されるので、何に集中して取り組むのかわかりやすかった。ハンドアウトも、ステップバイステップの課題が設けられ、自然に力をつけていく仕組みになっていた。松本先生は、英語も上手だが、教え方も上手で、私もそうなりたと思ったものだった。また、受講生の先生方も、ディベートや英語の力が高くて、私のよい刺激になった。おそらく受講生の先生方も同じように感じられたのではないかと思う。

4. まとめ

ワークショップは英語で行ったので、英語のブラッシュアップにもなり、また、生徒の側になれたのも、貴重な体験であった。

1日につき午前3時間、午後3時間で、それが夏休みだけで2週間あったのだが、それぞれ1回のセッションの中身の濃いことを考えると、その何倍もの勉強をしたようなもので、1日でくたくたになるほどだった。お盆休みの1週間が研修の間に入っていて、ちょうどいい具合に回復し、研修に集中できた。まるで、留学して学問に集中しているような体験だった。受講生の先生方にとっても、よい研修になったことと思う。